

平成九年度 二松学舎大学人文学会役員（五十音順）

会 長	石川 忠久
運営委員長	家井 真
運営委員	高山 節也・林謙太郎
	針原 孝之・源川 進
研究委員長	針原 孝之
研究委員	呉 英元・高山 節也
	竹下 悦子・武永 尚子
	戸川 芳郎・松田 存
	森野 崇
編集委員長	源川 進
編集委員	中村 宏・成田 修一
	林謙太郎・松川 健二
	松本 寧至・山崎 正伸
会 計	磯 水 絵
監 査	青山 忠一・久保田 美年子

△編集後記▽

今また人文学会に携わることになって、その現状を窺うと以前と違う点、相も変わらぬ部分と様々な所が見えてきた。今後の発展に繋がることを願って、特に感じた点について二三語ることによろ。その一つは、以前は教員も職員も自動的に会員であった所が、職員は抜けていることであろうか。私が助手をやっていた二十年前、人文学会の大会を控えて学校側（職員）に協力を求めても、快い協力には得られなかった。それは二松学舎大学組織の中にいる者は皆会員にさせられていたことが足を引っ張っていたのである。新規約では、教員と入会を希望する職員という形になってから、教員側に組織運営の関心が高まってきている。もう一つは、この会は上からいろいろな役所があるが、実質動いているのは助手だけである。以前と少しも変わっていない。それから、一番大事なことは、入学時に自動的に会員となっている学生の関心である。これが昔も今もさっぱりである。平成九年七月五日の大会に集まった学生は、百名いるかないかであろう。彼等は人文学会とは何か、また自分が人文学会の会員であるという認識すら持っていない者が多いのではないかに見受けられるのである。参加した学生に聞いてみると、興味のある科目の教授が出ると言ったので来た。ゼミの先生が役員をしているから出席した。その程度の動機である。学生の自主的な参加が無理だとするならば、情けないことであるが、もっと教員サイドからの呼び掛けと、学会への導きが必要ではなからうかと感じた次第である。最後に、この学会を底辺で支えてくれている助手の富澤慎人君と福本郁子さんにここから感謝するものである。

（源川 進）